

# 第十五回がん哲学塾

## ニュースレター

発行日：平成 30 年 11 月 19 日

神戸薬科大学 薬学臨床教育センター

E-mail:juku\_0307@yahoo.co.jp

10月27日(土) MBSにてちゃやまちキャンサーフォーラムが開催されました。  
今回は5年生、4年生、3年生、2年生が参加しました。

### ちゃやまちキャンサーフォーラムを終えて

3年生 本山 莉紗

今回のちゃやまちフォーラムでは、さまざまな団体のブースやステージでのトークショー、セミナーが行われていました。午前中は自分のブースで座りながらサブステージで行われた本音トークを鑑賞していました。ここでは医療者と患者との関係についてそれぞれが経験談を話しながら本音で語り合うというコーナーでした。そこで話されていたことで印象に残っていることは、患者側が医療者に対してうれしいと思ったことについて話をしていた時のエピソードです。若くしてガンを患ったその方は同じ病室にいた他の患者にステージが低いからいいねと言われてしまい、治療が苦しくてもつらいとは言えず、精神的に苦しい状況になっていました。それに気づいた看護師が何か悩んでいることがあるのかと聞き、その方の悩みを聞いてくれたといえます。その方はその言葉がとてもうれしかったと語っていました。その話を聞いたとき、わたしもその時の看護師のような存在になりたいと思いました。医療者側は治療法を考えるだけでなく、患者の心のケアにも気にかけることが大事だなと感じました。

午後からは乳がん治療についてのセミナーを受けました。はじめは山内英子先生の講義がありました。その講義で印象に残ったのは、「あなたはひとりではないのです。一緒に頑張りましょう。」という言葉です。ひとりで病気に立ち向かい、ひとりで悩みを抱え込んでしまう人は少なからずいると思います。そのような人たちにとってはこの言葉は心強い言葉だと思いました。その後、豊島美雪さんや麻倉未稀さんを加えてトークセッションが行われました。乳がんは身近な病気だと思っていましたが、実際の体験談を聞くのは初めてでした。胸の片方を切除したときには体のバランスが崩れ、上からものをとるときに勝手に体が残っている胸の方に傾いてしまうそうです。またホルモン剤治療を行っているときは関節が固くなってしまい、長い間座り続けていると足が動かなくなってしまったり立ってなくなってしまうこともあるそうです。このトークセッション中でも豊島美雪さんのポジティブな考え方には驚きました。普通はなぜ私かと思うけれど、私は神様がこの人なら何とかできるだろうと思って病気にしたのではないかと考えたと言っていました。なかなかそこまで前向きに考えられる人はいないなと思いました。また、豊島さんは切除をする際にパートナーの方と鏡の前でお別れ会のようなものをし、新しい胸を入れた際にははじめましての会のようなものをしたそうです。このようなパートナーとの関係はすてきだなと思いました。苦しい時にこそパートナーの助けは力になると思います。病気を患っているすべての人が豊島さんのようにパートナーとよい関係を築けているわけではないと思います。しかし、そのような人たちの助けになるような存在に私はなりたいたと思いました。

ちゃやまちキャンサーフォーラムを終えて、患者と医療従事者との関係の大切さを知り、また自分が考える薬剤師の理想像もより深めることができました。患者にとってよりよい医療従事者とはどういうものかを改めて考えていきたいと思います。

今回初めて参加しましたが、想像していたよりも何倍も何十倍も楽しく、また勉強になりました。

まず初めに、がんゲノム医療についてのセミナーを受けました。正直、難しすぎて、内容を理解して話に追いつくのは難しかったのですが、それでも今まで学校で習った薬やその標的分子がスライドに映されると「知っている内容だ!』とテンションがあがりました。といっても、話されている内容自体が難しかったので、理解まではいきませんでした。今自分のしている勉強が将来につながっている気がして嬉しく思いました。難しい内容が多かった中でも特に印象強く残っているのは、『何が原因か分かって、その標的分子に対する薬が、治験としてもないことがある』ということです。今では、その人のがん細胞から DNA を検出することで、いち早く原因を見つけ治療に臨める時代となっています。しかし、病気の原因が分かることと治療法が見つかることは別物だそうです。今は薬があって治療することができる病気も、数年前は治療に移れず、そのままお亡くなりになった方がいらっしやと聞きました。それは、患者はもちろん、医療従事者としても悔しいことだと思います。ここ数年で安価に検査を受けたり治療を受けたりできる世の中になっており、それだけでもすごいことだとは思いますが、まだまだ医療の発展が望まれるのだなと感じました。

セミナーを受け終わった後、チラシを配りつつ、様々な展示ブースを回りました。やはり一番盛り上がったのは、医療機器を 3D プリンターでミニチュア化させてガチャガチャの景品にしたものでした。欲しいものが出たわけではありませんが、先生・先輩・後輩交えて盛り上がったのはとてもいい思い出です。また、マシュマロタッチというマッサージを受けたのですが、とても気持ちよかったです。なんでも機械化する世の中ですが、このような人のぬくもりを感じることでできるものほどこれから人に求められるものなのだなあと再認識しました。エビデンスがなく本格的に医療現場に持ち込めないといったお話を聞きましたが、私はいつかきっと医療現場にも採用されると思います。というのも、私は一度入院したことあるのですが、無機質なベッドで何かできるわけでもなく横たわる日々を過ごしていると、お見舞いに来てくれる母の優しい手に触れるだけですごく落ち着いたからです。患者としてではなく人として接してもらった時の温かさというものは、言葉で言い表せないくらい素敵なのです。そのぬくもりを与えることができるのは人でしかないと思いますし、そのぬくもりを求めている患者さんはたくさんいらっしやと思うので、できるだけ早く医療現場に取り入れられることを期待しています。

ガチャガチャといいマッサージといい、ここには書きませんが原千晶さんが出店してらっしやったハンドメイドの品といい、今回このイベントに参加するというきっかけがなければ出会えなかったものばかりです。たくさんの方がいろんなアプローチをしているのを目の当たりにして、ただ単純に「すごいな」と思いました。自分たちにできることをやるということは、簡単そうで案外難しいと思います。それでも、少しずつでも何かしようとする想いを今回はとても感じる事ができました。

最初は何をするのかもわからず、ただチラシを配るだけかなあと思っていたのですが、とても楽しく勉強になる一日となりました。来年もまたこのイベントに参加したいですし、次はどのような催し物があるのか今から楽しみです。

今回のちややまちキャンサーフォーラムは、初めて参加させていただいたイベントでした。なので、「今日一日私が、ゼミ生としてできることは何だろう。」「家族や親戚など、身近にがん患者さんがいない私が、どのようにがん患者さんと接すればいいのだろうか。」などと内心不安な気持ちを抱えながら参加させていただきました。

まず午前中は、「がんゲノム医療」というセミナーを受講させていただきました。がん細胞の特性はゲノムによって決まっているため、一人一人のがんゲノム遺伝子を調べ、医療スタッフチームで議論することで患者さん一人一人に適した治療を選択することができ、将来的にがんの個性を重視した個別治療選択がさらに可能になるとのことでした。治療が個別化することで治療方針の選択に役立ち、薬による副作用の軽減や症状の緩和などが期待できると思えました。大学での普段の座学ではなかなか学べない、がんを取り巻く医療の現状と将来像について知ることができたとても貴重なセミナーでした。

午後はブースで様々な方とお話をさせていただきました。特に印象に残っているのが、チラシをお渡ししている時に、1人のお婆さんが、「私の友達が乳がんで、自分も話を聞いて言葉をかけたりすることがあるのだけれど、ぜひメディカルカフェに誘って一緒に参加したい。」と仰ってくださいました。この言葉を聞いて私は、今回ブースを出展させていただいた意味があったと感じたと同時に、メディカルカフェとはがん患者さん本人が苦しい気持ちを抱えて同じ境遇の方とお話できる機会を求めて来られる場、というだけでなく、がん患者さんの周りにいる家族や友達も抱えている不安を共有し合う機会を求めて来られる場でもあるのだと改めて感じることができました。また、チラシを受け取ってくださった他の方々みなさん笑顔で明るく自分の体験についてお話してくださる姿を見て、がんを経験してもこんなに前向きに生きている人もいるのだと衝撃を受け、がんも1人1人の個性であり、「病気であっても病人ではない」という樋野興夫先生の言葉を思い出し、実感として自分の中に取り入れることができました。

別のブースで、マシュマロタッチのハンドマッサージ体験をさせていただきました。普通のマッサージと違い、良い香りのアロマオイルを使いながらとても優しく触れるマッサージなので、癒されて心が穏やかになりました。このマッサージはがんに限らず病気と闘っている患者さんに一時の安らぎと安心感を与えることができると思いました。また、マッサージをすることで自然と互いの顔が向き合い、会話を楽しむこともできます。この時患者さんはとてもリラックスしているため落ち着いて本音を話せるのではないのでしょうか。会話のきっかけ作りにも最適であると感じました。このことから、私も将来薬剤師+αの技術を何か身に付けて目の前の患者さんにできることを増やしたいと思いました。

今回参加させていただいて、メディカルカフェという場を求めている人が本当にたくさんいらっしゃるということに改めて気づき、さらにメディカルカフェを広める活動をしていきたいと思いました。また、参加させていただく前は、がん患者さんとどう接すればいいかわからないと思っておりましたが今振り返るとがん患者さんだからといって特別視する必要はなく人それぞれ個性を持っている、ただそれだけの認識で良いのだろう、と思えました。ゼミ生としてできたことはほんの微力で自分の力不足を感じましたが、この経験は次に繋がる貴重な経験だったと思います。

## キャンサーフォーラムに参加して

3年生 伴 由紀子

まず、手術支援ロボット「ダヴィンチ」についての講演を聞きました。最先端の科学技術に触れる機会がなかったのでとても新鮮に感じました。ダヴィンチを活用していくにあたって、外科医の技術訓練が大変なことや触覚がないことなど課題はたくさんあります。しかし、内視鏡手術では取りにくかった肛門近くの直腸がんなどに採用することで、患者さんのQOL向上につながるこの話を聞いて、これからどんどん普及して欲しいと感じました。「ダヴィンチ」を採用すべき症例なのか、よく吟味する必要がありますが短所長所のバランスをとってもっと活用していけばよいと思います。

次に、マシュマロタッチというアロマを使ったハンドマッサージを体験しました。普通のハンドマッサージとは違い、ほとんど力をいれずに撫でるようなタッチのマッサージで、今までにない感触でした。人の肌の温かみを感じることができ、安心できてほっこりするような気持ちになりました。肌刺激に敏感になっているがん患者さんにもぴったりで、人肌の温かさを感じることで心も温かくなる効果があるように思います。少しでもこのマッサージを通してがん患者さんの心が温かくなれば、患者さん自身から心の内を話してくださるきっかけになるのではないかと思いますので、患者さんの話をよく聞ける薬剤師を目指す私もマシュマロタッチを勉強したいと強く感じました。

最後に PORA の方に教えていただきながら、ハンドマッサージを行いました。これは、適度な力をいれてマッサージをする、いわゆる普通のハンドマッサージです。マシュマロタッチとは感触も違うし、ほっこりというよりは気持ちいいと感じました。施術の終わった手は、こりがなくなって血が手先まで通っている感覚になります。マシュマロタッチとは、やり方は違いますが、誰かのためにマッサージをするという労りの気持ちは共通していたように思います。誰かにやってもらうから気持ちいいのであって、自分でやるよりも効果があるように感じました。

今回は、マッサージを通して「誰かのためにすること」「人肌の温かさ、安心感」の大切さを学びました。薬剤師として、むやみに患者さんに触ることはよくないことかもしれないけれど、「人肌の温かさは安心感を与えることができる」ということは頭に入れておきたいと思います。また、働くときは「患者さんのために」という気持ちを忘れないで仕事をしていきたいと感じました。

## ちややまちキャンサーフォーラム 2018 に参加して

3年生 渡邊 理乃

10月27日土曜日は、ちややまちキャンサーフォーラム 2018 に参加しました。患者会やサポート団体が MBS のロビーに集まり、情報や時間を共有しました。私たち神戸薬科大学は、「がん哲学学校 in 神戸メディカルカフェ」の案内をしながら、会場に来られた方々と交流を深めました。

次ページへつづく



MBS のセミナールームでは、医師や患者さんが講演を行うセミナーも開かれました。私は手術ロボットのダヴィンチ手術についての講演を聞きました。様々な職種で機械や人工知能 AI などが導入されているこの時代で、医療においてロボットがどのような働きをするのかとても興味を持ったからです。手術ロボットのダヴィンチは、人の手では限界がある細かい動きを補ったり、肛門付近にできた開腹や腹腔鏡では届かない部位の直腸がんの手術の時に力を発揮することがわかりました。あくまで操作は医師が行うものでしたが、利点ばかりではなく、触感や力加減などは多くの経験を積んだ医師でないと感覚が研ぎ澄まされないことまで学ぶことができました。しかし、患者さんのQOLを向上させるべく、手術ロボットを使いこなせる医師を育成するために、日々医師たちが努力をされてるとも聞きました。人では取り除く部位に限度があったものをロボットの導入により可能にしていると知り、もしかしたら切除できないがんはないという時代が来るかもしれないという希望までもつことができた講演でした。

他にも、不安や緊張を和らげる患者専用のタッチング技術である、マシュマロ・タッチをしてもらいました。マッサージをしてもらい緊張がほぐれるだけでなく、人肌に触れることで安心感も生まれ、とても落ち着いた時間を過ごすことができました。これは、患者さんと寄り添い、心を通わすことができるので、医療関係者と患者さんの溝を埋めるひとつの方法かもしれないと思いました。また患者さんだけでなく、普段からお世話になっている家族や友達にもマシュマロ・タッチが提供できれば、感謝の気持ちを肌の暖かさと共に伝えれると思いました。

今回の集まりは、テーマでもある「知る」「学ぶ」「集う」わかるがん情報をいろんな方と出会い、お話を聞くことで得ることがたくさんありました。また将来、処方された薬を調剤だけの薬剤師ではなく、広い視野を持ち患者さんに信頼してもらえるような薬剤師になりたいと強く感じた1日でした。

#### ちややまちキャンサーフォーラムに参加して

2年生 森山 由理

10月27日、ちややまちプラザで開催されたちややまちキャンサーフォーラムに参加させていただきました。4つの医療セミナーを中心に、サバイバーの方を招いてのトークセッションが行われたり、患者会やサポート団体の方々の展示ブースなどがあり、活気に溢れていました。

開催された4つの医療セミナーの内、私は「乳がん治療を知る、学ぶ」というセミナーに参加させていただきました。近年、乳がんになる人はどんどん増加しています。女性になるがんで一番多いのが乳がんであり、現在11人に1人が乳がんになるそうです。山内先生は大きく分けて5つのことを忘れないで欲しいとおっしゃっていました。それは、①1人ではありません。②全てを諦めないでください。③できることを一緒にやってみましょう。④上手く長く付き合ってみましょう。⑤患者らしくではなくあなたらしくいましょう、という5つでした。特に⑤の「患者らしくではなくあなたらしくいましょう」というのは、今回のイベントの一番最後に行われたクロージングセッションで、“これからのがん医療に望むこと”というテーマの際に、サバイバーの方が「患者としてではなくて1人の人として接して欲しい」とおっしゃっていたことと通じる部分があるなど感じました。“患者”と“医療者”という立場で向き合うのではなく、“人として”向き合うことが求められているということが分かり、医療従事者としての在り方について改めて考えさせられました。

次ページへつづく

山内先生のお話の後にはトークセッションが行われました。サバイバーさんの実体験を基に会場のお客さんから寄せられた質問に答える形式でした。私はゲストのサバイバーさんたちの明るさに驚かされました。病気が判明したときはもちろん悩み、不安でいっぱいだったと思います。しかしそれを乗り越え、自分の経験を同じ病気の人に伝えることで他の人の不安を和らげたり、少しでも前向きになってもらえればという気持ちがとても伝わってきました。このような熱い思いが伝わってか、会場の方々もサバイバーさんの話に真剣に耳を傾け、分かる分かつと頷きながら話を聞いていらっしやいました。

セミナーを通して、乳がんに関する知識も深まり、サバイバーさんの思いや会場の方々の反応も見ることができ、多くのことを見て聞いて感じることができました。

今回ちややまちキャンサーフォーラムに参加して、メディカルカフェとはまた違った出会いがたくさんありました。これからも様々なイベントに参加して、医療従事者としての中身の部分を成長させていきたいなと思います。



### 【樋野興夫先生】

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授、医学博士。

米国フォックスチェイスがんセンター、がん研実験病理部部長等を経て現職。2008年「がん哲学外来」を開設。高松宮妃癌研究基金学術賞受賞。著書に『いい覚悟で生きる』ほか

顧問：樋野興夫

教頭：沼田千賀子

副塾長：横山郁子

塾生：田中葉月、堀部里帆、森夕理子

久野聡子、増田悠香

アクティブラボ：渡邊理乃、伴由紀子、本山莉紗

中山愛理、鹿兒島成美、森山由理

